

## 男女共同参画の物憂いため息

—労働と選択の視点から—

池田 緑\*

### 要 約

男女共同参画社会という言葉が、社会の潮流を形作るようになったといわれて約10年。女性たちが労働に対して抱くイメージは変質した。しかし彼女らにとって、男女共同参画社会はどのように「経験」されているのだろうか。男性社会が強いてきた理不尽さは、どの程度解消したのだろうか。男女共同参画社会といわれつつも、多くの女性たちによって、一見したところ長い呼吸と区別がつきにくく、しかし確実になにかに対する希望をあきらめつつあるような、そして吐息の延長線上にあるような、かすかで物憂いため息が、あちらこちらで吐かれ続けているのは、なぜだろうか？

主に女性向けコミックにおいて、近年男女共同参画社会を反映したファンタジーが生産され、人気を集めている。それらのファンタジーは、仕事（労働）、性愛、男性による承認、という3つの要素の間におけるギャップがうみだすものである。しかしその背後には「女々格差」と階層性が潜んでいる点には注意が必要である。

さらに社会的には恵まれた条件の女性においても、公的領域と私的領域の競合があり、人生の重要な選択が迫られる場面では、多くの場合、私的領域が優先される。このような選択の場面こそ、女性を公的領域、私的領域の双方において無力化する契機となっている。それはたとえば女性医師のような「エリート女性」においても例外ではない。

一方でネオリベラリズム的な労働力の再編成が進むなかで、周縁化された男性と成功する女性という対比が出現しているが、それをもって女性の社会進出が果たされたと評価することはできない。同じ環境、階層に属する男女においては、依然として性別による格差が存在するからである。

公的領域における制度的平等の達成のみでは、真の男女共同参画は実現しない。男女をめぐる諸条件が不平等な状態での「共同参画」は、そのしわ寄せを女性にもたらしてしまうからである。男性社会は、この制度的平等からは窺い知れない女性の選択の矛盾、それにとまなう「ため息」に耳を傾け、自らの利害を再検討し、是正する必要がある。

## はじめに

近年、働く女性を主人公にしたコミックが人気を集めている。たとえば『サブリ』（おかざき真里）や『働きマン』（安野モヨコ）などがその代表例だろう。この2作品はテレビドラマ化もされ、人気をよんでいる。

いままで、主に女性を対象とした多くのコミックにおいて、「働く」ということは、一種の苦役として位置づけられてきた。昼間の苦役（＝労働）と夜の悦楽（＝恋愛）という二分法が作品の世界観として存在し、ストーリーはこの2つの時間と空間を、ある種の弁証法的な拮抗関係をもって進行していた。

しかし、ここで言及した2つのコミックにおいては、「働く」ということは、文字通り「働く」ことである。そこには苦しみもあるが充実もあり、苦役もあれば快楽も存在する。いままで、男たちが「仕事」に対して理想化してもっていたイメージが、恋愛をスパイスとしつつも、位相を少しずらした語法によってトレースされ、再生産されている。「働く」中身も、従来は一般職女性社員の単純作業や補助的作業を連想させるものであったのに対して、この2つのストーリーにおいては、総合職としての文字通り男性に伍しての仕事ぶりである。

かつて私は「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」という論考の中で、男女共同参画社会という概念が内包する制度的問題点や思想的問題点を考えた（池田，2004）。そこでの焦点は、女性が公的領域に進出することは男性並みに働くことではなく、同時に男性が社会撤退を行わなくてはならず、両性間に格差のある状態のまま制度的に均等な共同参画を行うならば、しわ寄せは女性にやってくる、というものであった。

男女共同参画社会という言葉が、社会の潮流を形作るようになったといわれて約10年。女性たちが労働に対して抱くイメージは明らかに変質したのかもしれない。しかし彼女らにとって、男女共同参画社会はどのように「経験」されているのだ

ろうか。男性社会が強いてきた理不尽さは、どの程度解消したのだろうか。男女共同参画社会といわれつつも、多くの女性たちによって、一見したところ長い呼吸と区別がつきにくく、しかし確実になにかに対する希望をあきらめつつあるような、そして吐息の延長線上にあるような、かすかで物憂いため息が、あちらこちらで吐かれ続けているのは、なぜだろうか？

## 1. 男女共同参画時代のファンタジー

戦後、女性たちの意識を表現するメディアとしてコミック（マンガ）はもっとも先鋭かつ洗練された位置を占めてきた。その時代の空気、その時代の女性たちに共感を呼ぶディテール、彼女らのリアリティ。コミック作者たちの状況把握能力は高く、つねに表現者として先頭を走ってきた。さしずめ研究者などは周回遅れのランナーだ。考現学として、あるいは時代の女性の意識パラダイムを地層のように観察したければ、女性向けのコミックを読むのが最適かつ効率的な方法である。

女性向けにヒットするコミックにはひとつの特徴がある。それはその時代のリアリティを十分に踏まえながら、実際にはアンリアルな物語を構築している点である。リアリティにあふれつつも、実際には起こりえないか、あるいはきわめて稀にしか起こらないことを描く。それは、一種のファンタジー・テイルである。かつては、少女マンガという「白馬に乗った王子様」という慣用的なからかいの文句が向けられた。ただし、実際の少女マンガには「白馬に乗った王子様」が登場するものはほとんど存在しない。登場するのは、スポーツカーに乗ったイケメンであったり、ときにはバイクに乗ったヤンキー（じつは心は優しい）であったり、またはギターを背負った少年であったりもした。

そして、それがリアルかといえば、じつはリアルでもなかったのだ。リアルなのは主人公（＝少女）の心の動きであった。少女マンガのリアリティは、ひとえに主人公の心の動きのリアリティにある。しかし、設定された状況は微妙にリアル

ではない。少女マンガを読んでいた少女の身の上には、スポーツカーに乗ったイケメンも、バイクに乗った心優しいヤンキーも、ギターを背負った美少年も、実際にはほとんどかかわることはなかったのである。それゆえに、リアルな心情と、現実にはありそうで実際にはなかなか存在しない設定や環境とのギャップが、ファンタジーをうみ出していたのである。リアルな感情と、リアル風で実際にはアンリアルな設定。そのギャップがファンタジーの源泉である。このような微妙な構造の上に成り立っていたファンタジーの生産に比べれば、白馬に乗った王子様（もしくはそれに類した存在）など、荒唐無稽以外のなにものでもなかったのである。したがって、実際に白馬に乗った王子様の登場するマンガはほとんど人気を集めなかったのだ（ごく少数の例外はあるにせよ）。

近年ヒットした、よしながふみによる『大奥』（2004年連載開始～現在も連載中）は、その意味で男女共同参画社会における明快なファンタジーである。若年男性のみが罹患する原因不明の疫病によって、男性人口は女性人口の1/4に減少してしまった世界。そこでは、武家も商家も当主はすべて女性である。徳川家光以降の歴代将軍もすべて女性（大岡越前まで！）。そして江戸城の奥には、男だけからなる大奥が存在し、そこに立ち入れる女性は将軍のみ。この男女の性別役割分業を完全に逆転させた設定は、男女共同参画社会をめざすという社会状況下において、初めてリアリティを獲得したといえる。この作品が提起している問題は、少子化時代に女性が公的領域に進出するという点である<sup>1</sup>。

『大奥』が女性読者たちのリアリティを獲得していったのは、まず公的領域に進出した女性（徳川吉宗がその典型）たちの心理やセクシュアリティを丁寧に描いていること、そして男性によって構成される大奥の人間模様やそこに居住する男たちの葛藤が、結婚と家庭に縛り付けられてきた女性たちの人間模様や葛藤とまったく同じ種類であったからにほかならない。一度入ったら死ぬか大きな痛手を負わなければ外界に出ることが出来

ない、男たちによって構成される大奥は、死ぬまで、あるいは痛手を負って離婚しないかぎり抜け出すことができない、結婚と家庭のメタファである。なによりもこの描写がリアルだったのだ。

そして『大奥』のもう一つの魅力は、徳川吉宗（女性）や春日局（これも女性）を筆頭に、公的領域における決定権を女性が保持しているというファンタジーを提供している点にある。一昔前なら、この設定は「白馬に乗った王子様」と同様、荒唐無稽なものとして、充分なリアリティを備えたファンタジーを提供できなかったであろう。しかし男女共同参画社会が謳われる現在、政党党首や大臣、国会議長に女性が登場する程度までには、女性の社会進出も進んだ。一般企業において男性と同等に働く女性も増えた。もちろん賃金格差や種々の格差は歴然として残っており、また男女共同参画というビジョン自体にも女性を安価な労働力として使い切るといふ産業界の欲望が潜んでいるだろう<sup>2</sup>。しかしながらマンガと現実のギャップが、少なくともファンタジーとして消費されうる程度には、女性の社会進出も進み、あるいは進んだというイメージが女性たちに共有されるまでに至っているのである。この意味で、『大奥』はまさに男女共同参画時代ならではのファンタジーである。

冒頭に紹介した2つの作品、『サブリ』と『働きマン』も男女共同参画社会のファンタジーと解釈することが可能である。おかざき真里による『サブリ』（2003年～2005年に連載）の主人公藤井ミナミは広告代理店に勤める20代後半の女性である。彼女は男性と同等かそれ以上に仕事をこなす。作者自身がかつて博報堂に勤務していただけあって、その仕事の描写にはリアリティがある。ミナミは仕事にも恋愛にも貪欲で、紆余曲折を経て、またいくつかのものを失いながらも、多くのものを手に入れてゆく。リアルな仕事の描写、欲望のリアリティ。しかし現実には、女性の大部分はミナミほど多くのものを手に入れることはできない（＝アンリアルな設定）。それを手に入れられるミナミの姿は、仕事と恋愛という二者択一を迫られている働く女性にとってのファンタジーで

あり、この作品が「癒し系」といわれた一つの理由はこの点にあると思われる。

一方で、安野モヨコによる一連の作品は、男女共同参画社会という理念が社会に受容されていく過程とパラレルな対応をみせている。安野が1997年に発表した『脂肪という名の服を着て』においては、「働く」ことは一種の苦役であり、職場とは自己の存立の基盤としてはふさわしくない、陰惨な場として描かれていた。女性の容姿とアイデンティティと社会的関係の三者の連関を残酷に描ききったこの作品においては、昼間の苦役（＝労働）と夜の悦楽（＝恋愛）という二分法が世界観として存在し、主人公のOL「のこ」は2つの時間と空間においてその存在が引き裂かれ、ストーリーはこの2つの時間と空間とを、ある種の弁証法的な拮抗関係をもって進行していた。

しかし安野は、『脂肪という名の服を着て』と並行して連載していた作品において、特定の価値観を貪欲に追い求めるエリートの姿を描いてもいた。『ハッピー・マニア』（連載は1995年～2001年）の主人公シゲタカヨコである。シゲタカヨコは貪欲な恋愛（性愛）の狩人であり、恋愛以外のすべてを犠牲にしても恋愛によってもたらされる幸福感を追い求める「恋愛エリート」であった。

シゲタカヨコの存在は、その基調において婚姻制度を拒否している。それは恋愛がもたらす高揚感のみを至上の価値と考えているからであり、他者を一瞬にして収奪するという恋愛（性愛）の快楽を至上とするため、婚姻制度が要求する奉仕や安定との衝突があった場合、迷わずに恋愛の快楽を優先しているからである。このような主人公の造型、すなわちモノガミーに基づく婚姻制度から逸脱し、他者（異性）の存在を収奪し征服する快楽を追い求めるキャラクターは、日本の近代文学の一つの典型である。古くは夏目漱石の『それから』における長井代助にはじまり、太宰治等の私小説系の登場人物、さらには三島由紀夫の一部の小説の主人公に、同様のキャラクター設定がみられる。シゲタカヨコは、日本近代文学の正統な系譜に属するキャラクターであり、とりわけ珍しいタイプではない。

シゲタカヨコが新しかったのは、そのようなキャラクターが女性であった点である。いままで、文学（マンガも含む）の女性登場人物も含めて、メディアに登場する女性には、抽象的な価値を至上のものとし、他のすべてを犠牲にしてそれを追い求める哲学的なキャラクターはほとんど存在していない。そのような抽象度の高い人生を送ることが許されるエリートの特権は男性に独占されていたからである。

シゲタカヨコはメジャーなメディアに登場した、ほぼ史上初の（男性と同等な意味における）エリートだったのである。そのようなエリートの人生は、1990年代後半の多くの女性にとって模倣することは困難であったろう。そして事実、シゲタカヨコはエリートであることが作品中でも示されている。シゲタカヨコは恋愛に人生のすべてを賭けているため、職業を転々とし、経済的にはつねに困窮している。そのために多くの読者は彼女が現実にもエリートであることを見落としがちである。しかしこの長い作品中で一箇所だけ、シゲタカヨコの学歴が明示されている箇所がある。第4巻（コミック文庫版）の74ページに彼女の履歴書の断片が小さく描かれている。それに目を凝らしてみると、シゲタカヨコは明治大学文学部卒であることが示されている。シゲタカヨコが通学したと設定されている1990年代初頭、大手予備校のデータによると明治大学文学部の受験偏差値は62～63の間を推移していた。

シゲタカヨコは「偏差値63の女」だったのである。シゲタカヨコは受験競争の勝者であり、1990年代の初頭において、六大学に通う女性は間違いなく女性の中のエリートであった。シゲタカヨコの破滅的で破天荒な数々の行動にもかかわらず、彼女は不思議と次々に就職口を決めることができていた謎も、これで氷解である。シゲタカヨコの恋愛エリート人生は、彼女が実際にエリートであったからこそ実践可能だったのである<sup>3</sup>。恋愛や性愛におけるリアリティの描写とエリート人生を歩む主人公のアンリアルさ、このギャップによって『ハッピー・マニア』は上質のファンタジーたりえたのである。

『ハッピー・マニア』のシゲタカヨコにおいては、もはや『脂肪という名の服を着て』の「のこ」の身の上に起きていたような分裂もなく、二つの生活圏に引き裂かれることもなかった。いくなれば安野は、男女共同参画社会という新たな社会的構造のなかで、女性の間に見えつつあった「女々格差」を作品ごとに描き分けていたともいえる。

同じく安野による『働きマン』（2004年～現在も連載中）の主人公松方弘子（28歳）は、シゲタカヨコの思想上の妹であり、進化形でもある。シゲタカヨコがエリートとして追い求めたものは恋愛であったが、松方弘子が追い求めるものは仕事である。彼女は大手出版社の雑誌編集者であり、男性以上に働き、あまりの勤労ぶりに彼氏に別れを言い渡されてしまうほどである。このエピソードは残業続きで離婚に至る男性サラリーマンを髣髴とさせる。そしてシゲタカヨコの恋愛に対する態度と、松方弘子の仕事に対する態度は基本的に同一である。実際、松方弘子が男であったとしても、この作品は難なく成り立つ可能性がある<sup>4</sup>。もちろん松方弘子も恋愛に悩むが、彼女は100%仕事を選ぶ。むしろサラリーマン漫画としてかつて一世を風靡した『課長・島耕作』（弘兼憲史・作）の主人公よりも、松方弘子は仕事に迷いがなくすがすがしいほどである。

『サブリ』にしる『働きマン』にしる、主人公はエリートである。大手の広告代理店や出版社で働く女性（しかも総合職として）は、間違いなくエリートである。男女共同参画社会のファンタジーの主体たりえるためには、エリートであることが必要なのだ。ここに男女共同参画という概念が内包している「女々格差」の問題が浮き彫りになる。

そして、『働きマン』がファンタジーたりえているのは、主人公をとりまく環境である。松方弘子は苦労を重ねながらも仕事において着実に充実感を獲得しており、また周囲の登場人物たちも彼女に対して十分なリスペクトを払っている。しかし現実には、たとえエリートの女性であっても、十分な充実感をえられる仕事にめぐり合える人は少なく、また仕事の成果に応じて男性と同等のリ

スペクトを受けられる環境にいる人は少ない。松方弘子は、仕事をする上で「働きマン」として十分に周囲からリスペクトされている、というアンリアルな一点において、ファンタジーの主人公である。単なる男性向けのサラリーマン漫画と『働きマン』の構造上の違いはここにある。

一方で男女共同参画時代の非エリート女性は、ファンタジーを享受できないのであろうか。そんなことはない。そこには、従来の少女マンガの伝統を受け継ぐ一群の人気作品が準備されている。たとえば、ジョージ朝倉による『ピース オブ ケイク』（2003年～現在も連載中）や魚喃（なななん）キリコによる『strawberry shortcakes』（2000年～2002年連載）等の作品である。これらの作品における主人公は、たとえばフリーターのような業績原理秩序から排除された女性たちである。これらの作品では、唯一の救いの可能性として恋愛が示される。いうまでもなく、従来の少女マンガにも恋愛を主軸としたファンタジーは数多くあった。しかし『ピース オブ ケイク』や『strawberry shortcakes』がそれらと一線を画しているのは、単にポジティブな幸福への切符として恋愛が描かれるのではなく、男女共同参画社会のなかで、業績原理秩序から排除された女性たちの閉塞感を十分に描いたうえで、「最後の拠り所としての恋愛」が描かれていることである。

しかし現実には、多くの女性は恋愛によっても救われない。仕事でも恋愛でも同様な閉塞感を感じている女性が多いのだ。恋愛はもはや状況に変革をもたらすものではない。結婚制度が女性に対して安定や救済や階層上昇を保障しなくなって以来、すでに恋愛が彼女たちに与える社会的な意味は変質してしまっているのだ。あたかも地獄に垂らされた一筋の「蜘蛛の糸」のように、恋愛によって救われる可能性を予感させる主人公たちは、その最後の可能性にアクセス可能であるという、アンリアルな一点においてファンタジーの主人公たりえているのだ。これらの諸作品は、男女共同参画社会のもうひとつの陰惨なファンタジーである。

2001年から2002年にかけて『文藝春秋』誌上に連載された桐野夏生の小説『グロテスク』（桐野、2006）は、いわゆる「東電OL殺人事件」にヒントを得た作品として知られている。そこに登場する東電OLをモデルとした佐藤和恵は、総合職女性として建設会社で働く業績原理至上主義者であるが、男性を中心とした業績原理秩序において乗り越えられない性差の壁があるとわかった時から、過剰なまでに男性の視線による承認を求め始める。その結果彼女は「売春婦」として渋谷の街角に立つまでになる。同時に『グロテスク』には、和恵にとってコインの裏面ともいえるようなユリコというキャラクターが存在する。誰もが驚くような美貌の持ち主であったユリコは、高校時代より徹底して男性の視線に晒され、その視線を利用して生きる生き方を選択する。しかし彼女もまた、最終的には「売春婦」となり、和恵同様に殺されてしまう。そしてその一方で、彼女らの出身高校であるQ女子高（描写の内容から慶應女子高校がモデルと推察可能である）には、最初から男性による承認が保証されている出身階層の高い一群の女子生徒たちが存在していた。業績原理にせよ美貌にせよ、それを資源として援用せざるをえない階層と、そもそも最初からそのような努力が不要な階層の対比が、残酷に描かれる。

仕事、性愛（セクシュアリティというニュアンスを含む）、男性による承認、この3つの関係が男女共同参画時代のファンタジーを生み出す源泉である。この三者をめぐるリアリティとアンリアリティのギャップが、この時代にあっては有効なファンタジーをうみ出すのだ。多くの女性たちはこの三者のなかで、もがき苦しんでいる。そして言うまでもなく、この三者の構造を決定しているのは男性社会である。

数年前に『冬のソナタ』をきっかけとして韓流ブームが起こったことは記憶に新しい。そのブームを支えたのは中高年女性であったといわれる。日本の中高年女性が韓流ドラマに「ハマった」のは、そこに登場するヒロインたちが、男性による圧倒的な承認を獲得していたからに違いない。それは現在の日本の中高年女性たちの存立基盤であ

る（と彼女ら自身に思われている）にもかかわらず、十分に受け取ることができていないものだからである。

この意味で、『サプリ』の人気は韓流ドラマに似ている。『サプリ』の主人公ミナミは、その心性において、仕事においても恋愛においても男性の視線による承認を切実に求めており、そしてそれは与えられている。この意味でも『サプリ』はファンタジーである。

しかし、現実の女性たちの多くは『グロテスク』の登場人物の側にいる。男性に見てもらわないと正気を保てない。男性の視点、それも性的な視線が彼女らには不可欠であるというメッセージに、社会的な日常生活において浸らされている。そしてその視線を渴望し、その結果、仕事と性愛と承認の三角関係の中で苦しんでいる。その三角関係をポジティブに描いたのが『サプリ』であり、その結果『サプリ』はアンリアルなファンタジーとして多くの女性に癒しの効果を与えた。一方でその三角関係をネガティブに描いたのが『グロテスク』であり、リアルなアンチ・ファンタジーとして多くの女性に戦慄を与えたのである。そして、この三角関係に留まっているかぎり、いずれにしろ女性は隘路に陥ってしまうのだ。女として男の胸に飛び込むか、男の視線に自らを晒すかという、いずれにしても男性の承認から逃れられないという隘路である。

この点において屹立しているのは、安野モヨコによって創造された『ハッピー・マニア』のシゲタカヨコと『働きマン』の松方弘子である。この両者は、最終的な局面において男性の承認を必要としない特権を享受している。かつて1998年に小笠原祐子が活写したような、男性の視線に晒され、あるいはその視線を逆に利用して、男性サラリーマンたちとの間でマイクロで男性対抗的な政治を展開するようなしたたかなOL・女性像（小笠原、1998）の片鱗は、松方弘子やシゲタカヨコにおいては、そのカケラも存在していない。彼女らの自立性はエリート性によって担保されている（そういえば『大奥』においても、女性による男性獲得可能性には階層差があることが示されてい

た)。それでも松方弘子の存在基盤には、背景化されているとはいえ、男性上司や同僚のリスクによって保障されている彼女の尊厳がある。

その意味でもっとも屹立したキャラクターは、男性による視線を、その存在の基盤としては、基本的には必要としていないシゲタカヨコである。シゲタカヨコの言動において特徴的なのは、彼女にとっての恋愛とはすなわち性愛として解釈されている点である。この等号性は近代のロマンティック・ラブ・イデオロギーの基本的枠組みであり、その意味においては、シゲタカヨコは性愛の過程において確認可能な「男性による承認」を求めているようにもみえる。しかしながら、近代社会において性愛を発動する主体として認められてきたのは男性のみであり、女性にとっての性愛とは男性が発動する性愛の契機を受け入れることと同義であった。しかしシゲタカヨコにおいては、性愛の発動主体はあくまでも彼女自身であり、「男性による承認」はもはや継続的に自分自身を支える基盤ではない。

「男性による承認」がもっていた女性への支配力は、ここには存在せず、むしろ自らの快樂のために利用すべき資源と位置づけられている。これはいままで男性のみが行使してきた特権である。シゲタカヨコによる性愛の価値の篡奪は、「承認」をめぐる男性権力への破壊行為であり、男性の性愛における権力を無力化し、換骨奪胎するものである。シゲタカヨコにおいて、性愛は女性支配の回路としての意味をもはや失っている。

『ハッピー・マニア』が数ある安野作品のなかでも格別の地位を占めているのは、このシゲタカヨコの「男による支配の回路」からの自立性にあると言ってもいいだろう<sup>5</sup>。

そのような僅かな違いがあるとはいえ、この二人のキャラクターは、男女共同参画社会の構造のなかでは、もっともファンタジー度が高いキャラクターである。いうまでもなく、ファンタジーはそれがアンリアルであるからこそ成立する。公的領域において、彼女自身の存在のみによって十分に存在意義をもち、男性の承認という隘路を免れている存在<sup>6</sup>。そしてその根拠は彼女らのエリー

ト性という階層にある。しかし、現実には松方弘子やシゲタカヨコのような女性はきわめて少ないのだ。

## 2. アムネリス問題

男女共同参画社会において人気をえているファンタジーの最大の源泉は、階層性である。ある意味で、現在の新自由主義的な社会潮流に即応した、救いのない構造ではある。しかしながら、それでも、これがファンタジーにかんする論点であることは、現実への視点を考えたとき、さらに暗澹たる気分をひきおこす。『サプリー』『働きマン』『ハッピー・マニア』といった諸作品は、女々格差の下層に位置している女性のみならず、現実のエリート女性にとってすらもまたファンタジーであり、多くの場合に獲得不可能なライフモデルであることを意味しているからだ。では、現実のエリート女性が直面している問題は、どのようなものなのだろうか。

イタリアの作曲家ジュゼッペ・ヴェルディが1871年に作曲したオペラ『アイダ (Aida)』は、よく知られている「アイダ行進曲」を筆頭に勇壮なスペクタクルが連続する前半部（第1・2幕）と、ドラマと音楽が渾然一体となった魅力を放つ後半部（第3・4幕）によって、数多いヴェルディ作品のなかでも『ラ・トラヴィアータ (椿姫)』と人気を二分している。

古代エジプトを舞台として複雑な内容をもつこの作品に対しては、その作品思想に対していくつもの批判がなされてきた。たとえばエドワード・サイードが『文化と帝国主義』のなかで一節を割き、『アイダ』の作品世界に充溢するオリエンタリズムを批判したことは有名である (Said, 1994=1998: 212-246)。しかしながら、ジェンダーの視点からみた場合、『アイダ』の作劇にはある種のリアリティを感じざるをえない。

『アイダ』の舞台は古代エジプトである。将来の王にもなりうると期待されている闘将ラダメ

スは、奴隷であるアイダと相思相愛の関係にある。しかし奴隷となっているアイダは、敵対する隣国エチオピアの王女であった。そこに敵役として、ラダメスを愛し、なにかにつけてラダメスとアイダの恋路を邪魔しようとするエジプト王女アムネリスが登場する。『アイダ』はこの3人の三角関係の物語として進行する。アムネリスはラダメスと結ばれてエジプト王国に君臨することを夢見ている。しかし、ラダメスはアイダへの愛情ゆえに、重要な国家機密をエチオピア王に洩らしてしまう。その場を現行犯で押さえたのはアムネリスであった。「アイダをあきらめ、私との愛を誓えば免罪する」とラダメスに迫るアムネリス。しかしラダメスは「アイダのために死ぬるなら本望」と、その申し出をきっぱりと断る。逆上したアムネリスはラダメスを神官（裁判官）たちの手に渡す。しかし、すぐに後悔するアムネリス。神官たちの裁きを、呪詛の言葉と後悔の言葉を歌いながら聞くアムネリス。生き埋めの刑を宣告されたラダメスは地下室に閉じ込められる。しかしそこには先回りしていたアイダが待っており、二人は永遠の愛を誓い合って死んでゆく。アムネリスは地下室の側で、その愛の崇高さに胸を打たれ、愛の成就を願う。

題名にもなっているように、このオペラの主役はアイダであり、その恋人ラダメスである。実際この二人は主役であるソプラノとテノールによって歌われる。しかし、オペラ全体を見渡したとき、真の主役はアムネリスであるといつてよい。アムネリスはいわば敵役であり、メゾ・ソプラノ（典型的な敵役担当）によって歌われる。しかし、アムネリスの性格付けは複雑である。前半部は単なる意地悪な女だが、劇の終盤（第4幕）では、ほぼアムネリスが舞台を支えているといつてよいくらいの重要な位置づけを与えられている。

アムネリスはエジプト王女であり、圧倒的な権力の保持者である。政策にも影響力を及ぼしうる公的な存在でもある。そしてやや意地悪な性格ではあるものの、前半部においては、彼女の言動はエジプトの「国益」に沿ったものであり、為政者

としての資質を十分に備えていることが示されている。しかしその態度に決定的な変化が訪れるのは、ラダメスの命が自らの決定権下にある状況となる第4幕である。彼女はラダメスの命を助けようと必死になったり、愛が拒絶されると逆上してラダメスの死を望んだり、すぐさま後悔して神官たちに対してラダメスを弁護したりと、大忙しとなる<sup>7</sup>。第4幕第1場において、アムネリスが「私との愛を誓えば免罪する」とラダメスに迫る場面は、ドラマと音楽が渾然一体化したアイダ全曲中の白眉ともいえるシーンであるが、そこでのアムネリスの態度は許しを与えようとする者というよりも、哀願する者に近い。

このアムネリスの態度を公私混同というのはたやすいだろう。しかし、公的領域において重要な決定権をもっているにもかかわらず、その行使に際して私的要因が大きな行動原理とならざるをえないのは、女性に課された構造的な問題である。彼女らは、男性の承認を得ないままに公的領域に留まることの困難さや負担を、無意識的にでも知っているのだ。自分自身が公的領域において活躍できるのは、その背後に私的領域における男性の承認があることが担保になっていることを知っているのだ。自分に公的なパワーを与えているのは、まさに男性社会であって、その男性社会に参加するためには、男性社会を支えている女性の役割を果たしていること、男性に選ばれていること、男性の視線によって承認を得ていること、それらのことが、公的領域における存立基盤を形成していることを知っているのだ。したがって、アムネリスの直面したジレンマは深刻であった。彼女にとって、ラダメスを愛し、ラダメスから愛されることと、王女であることは、同義としての意味をもちえたからである。そのラダメスが犯罪者となり、そのラダメスに対する決定権を自分が持っていることに気がついたとき、アムネリスは混乱の極みに達してしまう。

このような意味においては、アムネリスにおける公的領域／私的領域の相克は、きわめて現代的な問題である。これを仮に「アムネリス問題」と名づけよう。多くのエリート女性（にかぎらず働



いている女性)にとって、公的領域と私的領域の利害が衝突する局面は、もっとも深刻な決断を迫られる。そして多くの女性は、私的領域を選ばざるをえないのだ。その私的領域によって公的領域の存立基盤が準備されているという構造があるからだ。いうまでもなく、そのような二重底の権力的構造は男性には無縁である。男性は自らの能力(与えられた階層性も含めて)と努力によって、自らの存立基盤を、誰にも気兼ねなく形成することが可能である。『働きマン』や『ハッピー・マニア』の主人公たちが、乗り越えたかのようにみえる壁はこの点である。

アムネリスは、私的領域を公的領域に優先させざるをえず、その結果、私的領域においてはラダメスからの愛を失い、公的領域においてもラダメスの命を救えなかった。公的領域と私的領域の対立のなかでジレンマに陥り、図らずも私的領域を優先させる選択を行い、その結果として、公的領域と私的領域の双方において無力な存在となる。結果的にアムネリスは愛においても、権力においても無力であった。これは、多くの公的領域に進出した女性に対して仕掛けられた罠でもある。その犠牲者として、アムネリスは普遍性を獲得している。

古来、男性にかんしてなんらかのキャラクターを指し示すような象徴的な人名は豊富である。たとえば「あの人はこの会社のドンキホーテだ」といえば、無謀なことを恐れないステキなバカ者として、嘲笑と若干の羨望とともに語られるであろう。それと同じような意味において、女性の典型的キャラクターは驚くほど少ない。「あの女はこの会社の卑弥呼だ」といわれても、正直なところどのようなキャラクターを指し示しているのかピンとこないだろう。

一部の例外は、ある一つの共通した呼称で呼ばれる女性たちである。それは「悪女」。西太后、北条政子、日野富子、等。彼女らに共通していることは、少なくとも有名になるきっかけを作った時点においては、男性の承認など必要とせず、自立した権力を行使した女性である点だ。彼女らの多くが未亡人であったことは偶然ではない。かつ

ては男性によって承認されたかもしれず、そのことを基盤に公的領域に進出したかもしれないが、夫の死後は男性による承認の視線に頼らず、自らの意志を行使しえた、限られたスーパーエリート女性である。すなわち「悪女」とは男性の承認を必要としない自立した女性であり、逆に「よい女」とは、男性によって承認されなければならない、名無しの存在、男性にとって都合の「よい女」である(山内一豊の妻が典型例)。

また、オペラつながりでいえば、女性に最も人気があるオペラは『カルメン』(プロスペル・メリメ原作、ジョルジュ・ビゼー作曲、1875年)であるというのが通説である。そしてカルメンといえば「悪女」の代名詞でもある。男に破滅をもたらす、男を惑わす魔性の女。しかし、カルメンはシゲタカヨコと同様に恋愛の狩人であり、男性支配を拒否した女性でもある。彼女は最後の場面でストーカーと化したホセの求愛をキッパリと拒絶する。拒絶すれば殺されることを知っていながら、生きて男の支配を受けるよりも、死んで自分の尊厳と自立性を守ることを選択したのである。この自立性が『カルメン』が多くの女性ファンを惹きつけている源泉である。

しかし、アムネリスはそのような自立性を獲得することができなかった。彼女は弱く、その弱さは現代の女性にも共有されている種類のものである。弱さの結果、アムネリスは公的領域においても私的領域においても無力化され、社会的な死者となる。一方でカルメンも、自立性を獲得する代償として肉体的な死を迎える。この両作品の構造を比較すると、そこには再び女性にとっての隘路が見出される。自立性を獲得しようとした途端に、死か無力か、のどちらかに陥る危険性が跳ね上がる、という隘路である。そのどちらにも陥らずに済む道は、狭く、険しい。無力と死、そしてそれらから逃れる道、この境界線は、男女共同参画社会といわれる現在でも、明確ではない。むしろ多くの女性にとって、混迷を極めていてもよいだろう。

アムネリスという存在が指し示してくれる問題は、この境界線にかかわる問題である。彼女は明

らかに「悪女」の系譜に属していながら（前半部では意地悪く描かれている）、「悪女」になり損ねた存在なのだ。そしてその過程は、公的領域と私的領域のジレンマに陥り、身動きが取れなくなって無力化してゆく女性の在りようを、まざまざと見せつける。アムネリスはシゲタカヨコや松方弘子になり損ねたのだ。公的領域への女性の進出が進むであろう男女共同参画社会において、この「アムネリス問題」は、きわめて普遍的で、現代的なリアリティをもつものである。この意味で、シゲタカヨコや松方弘子やカルメンよりも、アムネリスはリアリティがあるキャラクターである。ヴェルディ（と台本を手がけたカミーユ・デュ・ロクルとアントニオ・ギスランツォーニら）は案外と解っているではないか！

### 3. 「エリート」という女性医師をめぐって

話は変って、医師という職業は、いうまでもなくエリートによってのみ構成されている。男性においても、医師であるということは、一定以上の収入と社会的ステータスを保証するものである。それが女性医師ともなれば、いかにエリートであるかがわかるだろう。

しかし、典型的なエリート女性であるにもかかわらず、女性医師の現実は複雑である。実際には、女性医師は増加している。全医師数約25万人のうち女性医師数は15.7%であり（2002年統計）、2005年の医師国家試験合格者の33.8%が女性であるという。29歳以下の若年層医師にかぎっては、男性医師は毎年100人ずつ減り、女性医師は300人ずつ増えている計算になるという。国立病院機構大阪医療センターの山崎麻美によれば、この女性医師率の増加が、全体としての医師不足の原因の一つになっているという<sup>8</sup>。すなわち、妊娠・出産・子育てで一旦離職したために、医局の人事から外れてしまったり、技術の進歩や知識の移り変わりに自信喪失に陥ってしまい、職場の復帰が困難になっているというのである。

また、医師の診療科目の選択において性差がみられる点も指摘されている。男女ともに内科を選

択する医師は多いものの、女性医師は小児科、眼科、皮膚科等に偏りがちという。2000年の女性医師の割合でみると、皮膚科（35.4%）、眼科（38.7%）、小児神経科（31.6%）、小児科（30.2%）等が上位を占め、内科は15%であるという（武田，2003：16-17）。考えてみれば、これらの診療科目はみな緊急性の低い科目ばかりである。一分一秒を争わないと患者が死んでしまうという診療科目ではない。ということは、過酷な勤務体制ではなく、余裕をもった勤務シフトを組める診療科目に女性医師が集中していることを意味している。ちなみに女性医師が最も少ないのは人数、割合ともに外科である。

社会の半分を占める女性、そのなかでもおそらくエリート中のエリートである女性医師。その彼女らが、ある意味ではエリートであるがゆえに私的領域との競合がおり、就労を続けられない現実がある。その結果としての医師不足である。この不足は若年層医師において女性の割合が増え続けている現状では、将来的により深刻な問題となるだろう。

さすがに日本医師会をはじめ、多くの医療関係者がこの状態に危機感を抱いている。なかでも循環器科は女性医師の数も少なく、きわめて深刻な人材難に見舞われている診療科目である。その診療科目の性格からして、循環器科は命にかかわる問題として、時間との戦いを強いられる。傍からみれば、ガン治療と並んで医学の花形分野にみえる循環器科であるが、その勤務形態の過酷さは想像を絶している。またこの科目の医師は、多くが当直制度を経験するという。まずその勤務シフトの過酷さから、女性医師の就業希望や定着率は低い。

勤務時間や勤務体制の厳しさに加えて、果敢にも循環器科でのキャリアを積もうと決心した女性医師には、思わぬ困難が待ち受けている。それは医療施設のハード面での不備である。休憩室や当直室、シャワー施設はあっても、それは男性用（というよりも一つしかない）であり、女性医師が十分に休息を取れる状態ではないという。この点においては、同じ医療現場であっても、女性の

比率が高い看護師のほうが、勤務体制も含めて休憩施設や託児施設等も充実しているという<sup>9</sup>。

数少ない循環器科医師の一人である瀧原圭子氏（大阪大学大学院医学研究科）へのインタビューによると、循環器医療の現場での女性医師への性差別的取り扱いはほとんどないという。それは元々女性の数が極端に少ないこと、また医学セクションの特徴として、アメリカ合州国の学会との人的、制度的交流が盛んであり、米国の医療システムとのつながりの深さゆえに、性差別的扱いが存続する余地は急速に減りつつあるという。

このような医師不足、とくに女性医師の絶対数の不足と定着率の低さを前に、日本循環器学会でも対策を考えるようになったという。2006年度に開催された第70回日本循環器学会総会においては、「More Women in Cardiovascular Medicine」と題したセッションが設けられ、それ以降も継続的に開催されているという。このセッションには米国やドイツの医師も参加しており、このような労働環境と人材面における女性の不利益は国境を越えた問題であることが窺える<sup>10</sup>。

このような試みは、男女共同参画社会の制度的基盤を準備するという視点からは、評価に値すると思われる。いうまでもなく、勤務体制や医療施設のハード面の管理にかんしては、大学病院の教授や院長クラスの医師が管轄権を持っているはずであり、そのような役職についている医師の多くは男性高齢者であると推測できるからである。医師不足という医療現場にとって最悪な危機を背景にしつつも、その危機を女性の就労支援に転化することは可能であり、求められている施策といえる。また、日本医師会も2007年1月に「日本医師会女性医師バンク」を設立し、就業支援や再就業支援（再研修）を行う体制を整えつつある<sup>11</sup>。

しかも女性医師の定着を図ってこれらの施策がなされてゆけば、それは同時に男性医師にとっても歓迎すべきものとなるだろう。当直制度の不備など、勤務の過酷さは男性医師にとっても社会や家族との関係を断ち切る原因となりうるからだ。私はかつて「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」という論考の

なかで、男女共同参画社会において求められているのは、女性が男性並みに働くことではない、つまり「女性の社会進出」ではなく「男性の社会撤退」こそが必要であると書いた（池田，2004：15-18）。このような試みによって過酷な労働状況が改善されるならば、それは男性にとっても効用をもたらし、本来の意味での「男女共同参画社会」に近づくものとなるであろう。

循環器科に代表されるように、医療現場の労働は過酷である。その状況は人間らしい労働とはいえないほどのものである。その矛盾はまず女性にきている。エリート中のエリートである女性医師。しかしそのエリート性ゆえに、たとえば夫が在宅で仕事を行っているとか、祖母が子供の面倒を見てくれる、といった恵まれた環境にないかぎり、現実には家庭、子供、育児をあきらめるか、あるいは医師であることをあきらめるか、という極端な選択を迫られてきた。いわば「スカートをはいた男性医師」として生きてゆくという勇氣ある決断ができない場合、その葛藤は公的領域と私的領域の衝突という、「アムネリス問題」を容易にひきおこしうる。エリート中のエリートである女性医師であっても、この問題からは無縁ではないのだ。そして男女共同参画社会化のなかで、女性たちはこの問題により頻繁に直面せざるをえなくなるのではないだろうか。

#### 4. 物憂いため息の彼方に

いや、そんなことはない。すでに女は強者だ。彼女らは「働けイデオロギー」に染まってどんどん社会に進出している。女としての幸せや母性を忘れて。男たちの職を奪い、高い給料をもらい、豪華なレストランで食事をし、海外旅行にも行っている。行政を見てみる。フェミニストたちは男女共同参画委員になって、好き放題やっている。もはや彼女らは強者なのだ。

一方では、こんな男たちの声が聞こえてくる。勝ち組／負け組という言葉が象徴するように、正規社員としての労働から周縁化された男性が増

えている。彼らは正規労働から疎外されているがゆえに、社会経済的な低位に甘んじざるをえず、結果として恋愛や結婚からも周縁化される。彼らからみれば、消費社会を満喫し恋愛も満喫している同世代の女性たちは、むしろ強者だ。本田透が『電波男』のなかで「負け犬」女性を「恋愛資本主義者」として糾弾した文脈は、一部の男たちにとっては、ある種のリアリティをもっている<sup>12</sup>。

たしかに一部の女性は、ネオリベラリズム的な労働力再編成の過程で成功し、多くの男性よりも高い収入と地位を得ているかもしれない。しかし、その背後にいる多くの女性はより自己決定が困難な状況に追い込まれている可能性がある。パートも含む労働者の男女の賃金格差は、男性を100として女性は1998年が51.2%であったのに、2004年には49.5%であり、格差はむしろ拡大している点に注意が必要である（中田，2005：102）。広田照幸が指摘するように、日本社会における格差は女性にとってより大きなものとして帰結しているのだ。とくに低所得者層の女性にとって、労働力の再編成のしわ寄せはもっとも大きなものとして経験されるはずである（広田，2000：224）。

男性の賃金の低下と男女賃金の平均化は時を同じくして起こっているため、周縁化された男性にとっては、この2つの事象に相関があるように見えてしまうのだ。しかし、ここで注意が必要なのは、たとえ高収入の女性が増加し、低収入の男性が増加していたとしても、その2つの存在はトレードオフ関係にはなく、同時に収入がより低くなる女性も増加している点である。

男性間の格差の問題は女性の社会進出に責任を転嫁され、女性間の格差の問題は、男性の階層分化の進行によって男性間の格差の強調がなされるほど、相対的に不可視化される。もし、男性よりも女性が優位に立っているとすれば、それは同じ社会的条件、社会的階層に属する男女について考えなくてはならない。高所得者同士、低所得者同士、それぞれの男女を比較して考えてみなければならない。つまり基幹職で高収入の女性が増えたのなら、彼女たちの位置は、周縁化された男性との間ではなく、同様に基幹職で高収入の男性

と比較されなければならない。本当に彼女らは、同じ企業内ポジションにいる男性よりも優位なのか。そこには慣習的な男性の特権的なコミュニティは存在していないのか、そのような「男性たちの絆 (homo-sociality)」によって情報経路から排除されることはないのか、給与の差はないのか、昇進までの期間に性別によって有意な差はないのか、これらがすべて女性に有利であったならば、はじめて女性は優位に立っているといえるだろう。それはいままで男性が享受してきたことでもある。

同じく、周縁化された男女において、はたして女性のほうが再就職（正社員への）の機会に恵まれているのか、低所得者層における家庭内での女性労働力の搾取は存在しないのか、低所得者層における女性への性的な搾取は存在しないのか、これらがすべて女性に有利な条件が揃ってはじめて女性が優位に立っているといえるだろう。実際には男性のほうが再就職の機会に恵まれているし（若年の場合を中心として）、家庭内労働力の搾取、劣悪な職場環境におけるセクハラなどの性的な搾取は後を絶たないのである。

各階層における男女、あるいは同じ職制の男女を比較して、多くの場合男性のほうが優位であり、また搾取を行う側であるならば、労働力の再編成が行われてもなお、男性の優位は全体として変わらないのだ。

いったい、何度このようなため息を聞けばいいのか？

いったい、いつまでこのようなため息を聞き続けることになるのか？

そのため息は、一見したところ長い呼吸と区別が付きにくく、しかし確実になにかに対する希望をあきらめつつあるような、そして吐息の延長線上にあるようで、かすかで物憂い。

かつての女性たちは、大きくて、攻撃的なため息をついていた。それは、自分の状況がままならない理由を、理論的にあるいは本能的に知ってい

たからだ。対象が明らかな場合、ため息は、攻撃的で、抵抗への一歩手前の呼吸と重なる。

しかし男女共同参画時代に、社会で働く女性から洩れるため息は、もっとかすかで、温度も低い。まさに「洩れる」という表現が適切だ。耳をそばだてていないと、吐息と区別がつかないくらいだ。男女共同参画社会においては、どのような生き方を選択するのも、女性本人しだい、と思われがちだ。女性たちの前には拡大された選択肢が並んでおり、そのなかから、本人の能力に応じて、自由に選択が可能であるかのような錯覚が語られる。

選びたくとも選択肢がない状況であれば、責任の所在は明確だ。元凶は選択を選ばせない、選択肢を与えない男たちだ。ため息は男たちへの怒気をはらむ。しかし女性の公的領域への進出が当然のこととされ、自由な選択があるかのように見える現在においては、その選択には「自己責任」という裏のタームがつきまとう。

しかし、実際には自由に選択などできる女性は一握りにすぎない。相変わらず選択肢は少ない。名目的には多様な選択肢が存在していても、公的領域と私的領域が競合したとたんに、私的領域を優先させざるをえなくなるからだ。多くの女性は、自由に選択したくとも、そもそもそのような選択肢がないことに気づき、自動的に何かを選択する事態、もしくはなにごとにも選択しないという事態と直面する。しかもそのような決定が、自己責任という名で自分自身の個別的な選択の結果として問われるという事態はよく理解している。

その結果、彼女たちはどうしてよいかわからずに途方にくれ、もってゆき場のない感情がかすかなため息となって洩れだしてくるのだ。このような場面で、男女共同参画社会という概念は、最悪な女性への支配のツールとして、女性の労働力を私的領域に回収させるアリバイの回路として、作動しはじめる。それにかんして、彼女らの弱さを指摘するのは簡単だろう。たしかに彼女らは充分すぎるほどに弱い。しかし弱いのも当然だ。女性は強い存在であることなど許されてこなかったのだから。

女性は、つねに公的領域においてなにごとかをなす場合に、反対になさなかった場合、すなわち私的領域に退却した場合、との間で葛藤を抱え、悩まざるをえない。その状況は男女共同参画社会になっても変わっていない。そして、これまた変わることなく、男性にはそのような葛藤も悩みも、社会構造的には存在していない。

日本国憲法14条は「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」と、法の下での平等と差別の禁止を謳っている。言い換えれば、差別とは「人種、信条、性別、社会的身分又は門地」によって、特定の生き方を強制されるということでもある。しかし、生まれついた性別によって、片方はつねに悩み葛藤し続け、片方はそのような悩みや葛藤を免除されているのであれば、これは差別にほかならない。「生きてゆくうえでの様式」を強要されているのと同義であるからだ。

かつてリベラル・フェミニストたちは制度上の平等を求めて闘ってきた。その到達点が男女平等選挙という公民権の獲得であった。さらにそのリベラリズムのロジックは、退役軍人の特権 (Veteran's Bonus) の平等を含め、福祉国家戦争起源説の立場から女性兵士の戦闘参加まで実現させてきた (上野, 2006: 15-17; 47-57)。しかし、制度的な平等、換言すれば公的領域の秩序の平等の達成のみでは、実質的な性不平等は解消しなかった。ラディカル・フェミニズムを筆頭とする第2波フェミニズムの台頭は、このような公的領域の平等のみでは、女性は差別から解放されないとの認識を背景としていた。したがって彼女らは、私的領域である性愛や恋愛こそを、性支配の現場として問題化した。

半世紀ほども前に繰り広げられた不平等の構造が、再び男女共同参画社会という社会的スキームのなかで繰り返されている。参画の方法や、参画への敷居の高さや、参画によってもたらされる利害が異なるなら、単に共同で参画するだけではダメなのだ。むしろそれは、方法や敷居の高さや利害の違いを隠蔽するロジックとしてしか機能しな

くなる。そしてそのロジックによって、結果的に利益をえているのは、男性なのだ。この構造は、半世紀前となにひとつ変わってはいない。

そして男女共同参画社会という言葉によって、その状況の理不尽さを表明することも困難になりつつある。ため息は小さく、かすかに、温度の低いものとなりつつある。そのように物憂いものになればなるほど、男たちはため息を聞く機会も、聞く態度も喪失してゆくだろう。ため息すら、封殺されつつあるのだ。

わたしたち男性がなすべきことは、まずこの物憂いため息に耳を傾けることである。それがどのような文脈で、どのようなタイミングで、どのような大きさで、どのような温度で、なされているのかを聞くことである。そして、同様の局面や文脈で、なぜ自分からはため息が出ないのか、その理由と彼女らとの違いに考えをめぐらせることである。そして彼女らのため息の意味を考え、それを受け止め、自分に可能なことをなすことが必要である。そして一番重要なことは、彼女らに、思いきりため息をついていいのだ、それを聞いて受け止める準備があるのだ、ということ伝えることだと思う。

<sup>1</sup> 『大奥』では、男性が極端に少ない時代であるために少子化が進行している。そのなかで、かつての男性労働の領域は女性に取って代わられているのである。

<sup>2</sup> 男女共同参画社会というビジョンが内包する様々な問題点、さらには女性を資源として動員する視点については、池田（2004）において詳しく論じたので、参照されたい。

<sup>3</sup> 実際、シゲタカヨコと終始恋愛関係を演じる相手である「タカハシ」は、東大生というエリート（すなわち高階層出身者）として描かれている。その他にシゲタカヨコの恋愛相手として登場するのは、その多くがエリート商社マン、陶芸家、宗教家の息子、旅館の若旦那等であり、『ハッピー・マニア』の基調は高階層集団における物語として進行している。

<sup>4</sup> 実際、『働きマン』が連載されているのは、『週

間モーニング』という講談社発行の主に男性読者を想定したマンガ雑誌である。

<sup>5</sup> この他に、働くエリート女性を主人公としたコミックとして有名なものとして、小川彌生『きみはペット』（2000年～2005年連載）がある。しかし、女性が男性の視線の承認を必要としているという意味においては、この作品はもっともその傾向が強く打ち出されたものであった。充分すぎるほどの承認が与えられる、という意味において別種のファンタジーを構成していたと思われる。

<sup>6</sup> この意味で、少女マンガのなかには登場人物の公的領域での活躍を充分すぎるほど描いた先駆的作品が存在する。青池保子による『エロイカより愛をこめて』（1976年～現在も連載中）である。少女マンガの概念を変えたといわれるこの作品では、美術品窃盗家であるイギリス貴族の男性とNATO軍の少佐の、プラトニックな愛憎関係を中心に物語が進行する。いわゆる「やおい系」、「BL（ボーイズ・ラブ）系」の精神的な先駆的作品でもあるといえるだろう。と同時に『エロイカより愛をこめて』では、少女マンガでありながら恋愛要素は背景化しており、主に米ソの冷戦とソ連邦の崩壊という国際情勢にまつわるスパイ活動や軍事活動の話題を中心に物語世界は組み立てられている。

このコミックが女性たちに絶大な人気を誇った背景には、公的領域における活躍を禁止されてきた女性たちの、公的領域への進出の欲望の仮託という側面があったとも考えられる。作家の室井佑月は、『エロイカより愛をこめて』の文庫版19巻の解説において、「そういや、同級生でエロイカ・ファンだったやつらは、みんな女の幸せをかなぐり捨てて仕事に生きている。自分の夢を追いかけている。男と仕事を天秤にかけ、結局、仕事を選んでるやつらばっかだ。」と記しているが（『エロイカより愛をこめて』文庫版第19巻：285）、これは、男女雇用機会均等法成立直前から男女共同参画社会基本法制定へと向かう時代の、女性たちの公的領域への欲望を、この作品が掬い取っていたことを示唆している。

そのように考えるとき、これまた大人気を誇っ

た少女マンガ、『ベルサイユのばら』（池田理代子・1972年～1973年連載）は、マリー・アントワネットと主人公オスカル（男性として育てられた女性）という女性の、公的領域における存在様態を描いた作品として再配置することも可能である。さらにいえば、戦前より人気を博し続けているタカラヅカ（宝塚歌劇）も、女性が男性をも演じるという作劇手法を通じて、女性の公的領域への憧れを表現していたとも解釈可能である。

女性の公的領域への欲望は一貫して存在しており、ここ20年においてそれは具体性をもって顕在化し、現在では文学やコミックの世界観として重要な位置を占めるようになった、と考えられるのである。

<sup>7</sup> 言うまでもなく、一方的な愛と、その愛の拒絶、そして拒絶への復讐というテーマは、イエスとユダの関係に遡るヨーロッパ文芸の根本的テーマであり、『アイダ』もまたこれを踏襲しているといえる。

<sup>8</sup> [http://www.onh.go.jp/woman\\_dr/hajimeni.html](http://www.onh.go.jp/woman_dr/hajimeni.html)

<sup>9</sup> これはあくまでもハード面にかんする問題についてであって、女性看護師の世界にはこれとは別種のジェンダー論上の諸問題が数多く存在する。しかしこの点は別の論点であるため、稿を改めて論じたい。また看護師の場合、その95%が女性であるために女性に対する配慮が必要とならざるを得ない事情がある。さらに男性看護師の多くは、過酷な勤務シフトが敷かれていない精神科、神経科等に集中しているという事情もあるようである。

<sup>10</sup> ちなみに、女性医師が直面する問題は国境を超えて類似しているようである。たとえば、日米において女性医師を対象に医療行為から生活面、ライフコースの構築に至るまでのガイド的な本がそれぞれ刊行されているが、そこで取り上げられているトピックや議論には、きわめて高い類似性がみられる。詳しくは津田編著（2005）、Bowman, Frank, and Allen（2002=2006）の両書を比較参照されたい。

<sup>11</sup> <https://www.jmawdbk.med.or.jp/app/PZZ>

## 000. MAIN

<sup>12</sup> 「負け犬」とは、未婚（あるいは離婚後独身）で子供がいない30代以上の女性たちを指した言葉で、酒井順子はその著書『負け犬の遠吠え』において使用したところ、ブームとなった（酒井，2003）。ただし「負け犬」という用語は、独身ではあるが豊かで充実した生活を送っている女性たちへのエールとして使われた酒井の用語法を離れ、単に「負け組」と同義の言葉として流通するようになる。この間の政治的含意については、池田（2005b：88-90）において詳しく論じたので、参照されたい。また本田透は、「負け犬」と呼ばれる女性たちは、恋愛市場において恋愛を資本化して快楽を貪った結果、独身でいるに過ぎず、旺盛な消費意欲と実行力を備えた彼女らは、恋愛至上における強者であると指摘した（本田，2005：68-74）。

## 参考文献・参考コミック・参考WEBサイト一覧

（文献）

- Bowman, Marjorie. A, Frank, Erica, and Allen, Deborah. I 2002 *Women in Medicine: Career and Life Management, 3<sup>rd</sup> Edition*, (翻訳・編集代表 片井みゆき 2006『女性医師としての生き方—医師としてのキャリアと人生設計を模索して—』じほう)
- 藤本 由香里（白藤 花夜子）1999『快樂電流』河出書房新社
- 広田 照幸 2000「なぜ林道義氏は人気があるのか」『中央公論』115（11）：218-225
- 本田 透 2005『電波男』三才ブックス
- 池田 緑 2004「“男女共同参画”とその社会的言説—産業社会と寛容さをめぐって—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』13：9-23
- 池田 緑 2005a「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察I—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—社会情報系—）』14：55-77

池田 緑 2005b 「平等，寛容，想像力，そして植  
民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅱ  
—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—  
社会情報系—）』14：79-99

池田 緑 2006 「おばけは生まれ変わることができるか？—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅲ  
—」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要—  
社会情報系—）』15：15-38

桐野 夏生 2006 『グロテスク（上・下）』文春文  
庫

三浦 展・上野 千鶴子 2007 『消費社会から格差  
社会へ [中流段階と下流ジュニアの未来]』  
河出書房新社

中田 進 2005 「働く女性の権利とたたかい」 鯨坂  
真編 『ジェンダーと史的唯物論』学習の友  
社：97-129

小笠原 祐子 1998 『OLたちの<レジスタンス>  
—サラリーマンとOLのパワーゲーム』中公  
新書

小倉 千加子・中村 うさぎ 2006 『幸福論』岩波  
書店

Said, Edward. E1993 *Culture and Imperial-  
ism*, (大橋洋一訳1998『文化と帝国主義1』  
みすず書房)

酒井 順子 2003 『負け犬の遠吠え』講談社

武田 裕子 2003 「女性医師の最近の動向」日本家  
庭医療学会編 『がんばれ！女性医師・医学生  
—仕事とパーソナル・ライフの充実をめざし  
て』プリメド社

津田 喬子・編著 2005 『女性医師からのメッセー  
ジ—医系キャリアアップの道しるべ』真興交  
易医書出版部

上野 千鶴子 2006 『生き延びるための思想—ジェ  
ンダー平等の罨』岩波書店

山下 悦子 2006 『女を幸せにしない「男女共同参  
画社会」』洋泉社

(コミック)

青池 保子 1997-2005 『エロイカより愛をこめ  
て』(1~20巻) 秋田文庫

安野 モヨコ 2001-2002 『ハッピー・マニア』

(1~6巻) 祥伝社コミック文庫

安野 モヨコ 2002 『脂肪という名の服を着て [完  
全版]』祥伝社

安野 モヨコ 2004-2007 『働きマン』(1~4  
巻) 祥伝社

ジョージ 朝倉 2004-2007 『ピースオブケイク』  
(1~4巻) 祥伝社

魚喃 キリコ 2002 『strawberry shortcakes』祥  
伝社

小川 彌生 2000-2005 『きみはペット』(1~14  
巻) 講談社

おかざき 真里 2004-2007 『サプリ』(1~6  
巻) 祥伝社

よしなが ふみ 2005-2006 『大奥』(1・2巻)  
白泉社

(WEB サイト)

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター女性  
医師勤務環境改善プロジェクト [http://  
www.onh.go.jp/woman\\_dr/index.htm](http://www.onh.go.jp/woman_dr/index.htm)

日本医師会女性医師バンク [https://www.  
jmawdbk.med.or.jp/app/PZZ000.MAIN](https://www.jmawdbk.med.or.jp/app/PZZ000.MAIN)

付記：

本稿の内容を考察するにあたって、瀧原圭子氏  
(大阪大学大学院医学研究科) ならびに高田英弦  
氏(『メディカル・トリビューン』誌編集部) より  
非常に有意義なお話を伺うことができた。記し  
て感謝したい。また、ご本人の希望により氏名は  
省略させていただくが、医療関係者ならびに企業  
で働く多くの女性から有意義な話を聞かせていた  
だいたことは、本稿の成立に大きな影響を与え  
た、あわせて感謝の意を表したい。



## **Gender equality society and its discontents : From viewpoints of labor and alternatives.**

IKEDA MIDORI

*School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

### **Abstract**

It was said that words called “the gender equality society” came to form a social tide, about ten years ago. Perhaps the image women have for labor changed in quality during this time. However, how will they “experience” a gender equal society in the future? How would the unreasonableness that male society forces on women dissolve? Why is it that many women continue to display a dim, languid, and whispered sigh in many places?

In late years some fantasies which reflect gender equality society are produced and gather in popularity, such as comics for women. Those fantasies are produced by gaps to be able to put between three elements, works (labor), sexual love, and approval by men. However, a social hierarchy hides behind the fantasies at the same time.

Even with women in a socially comfortable position, there is a struggle of public domain and private domain within them. And, in situations where the choice of life is pressed for, women give priority to private domains in many cases. Such a choice prepares for opportunities that neutralizes women in both sides of public and private domain. For example, it is not an exception for “an elite woman” like a female doctor either.

On the other hand, a comparison of successful women and men on the fringe socially appears while reorganization of work based on neo-liberalism. However, I cannot evaluate those situations as gender equality advanced as yet. The reason is because men and women belonging to same the environment and hierarchy, but are still separated by sex.

Only by the achievement of equalities of the systems in public domains, true gender equalities can not be achieved. The reason is because “the joint participation” in the state that many conditions around men and women are unequal brings women further inequity. Men have to listen to “sighs” brought by the choices of women which is not solved equally in the system, reexamine own interests, and correct them.

### **Key Words** (キーワード)

gender equality society (男女共同参画社会), labor (労働), alternatives (選択肢), comics (for women) ((女性向け) コミック), fantasy (ファンタジー), differences between women (女々格差), sexual love (性愛), elite (エリート), marriage system (婚姻制度), self-subsistence (自立性), public domain (公的領域), private domain (私的領域), evil woman (悪女), woman medical doctor (女性医師), cardiovascular medicine (循環器医療), reorganization of labor (労働力再編成), sigh (ため息), “supple” (『サブ

リ』), “happy mania”(『ハッピー・マニア』), “Aida”(『アイダ』), “amneris trouble”(アムネリス問題)